

余話

「書」のことなどあれこれ

近年は年賀状ならずとも同じ字体のあいさつ文や連絡文が多くなつた。間違いがなく、読みやすいという点では、優れた機能文字である。内容の過不足のなさも、幾つかの手順を踏んだものと解り不自然ではない。でも、不思議に、さて、拝読という緊張感は生まれない。一時代前の人は「文は人なり」とか「文字は人となり」と云っていたものである。現代社会ではパソコンがクローン人間の手を量産しているように思えてならない。宛名を見ただけでは誰からのものか分からないばかりか、私信に至っては、差出し人の心情の機微や揺れなどは、ほとんど伝わって来ない。

また、人にもよるが、返書が忘れた頃に来て、しかも長々と言いつけが書かれているのは余り嬉しくはない。頂いた便りには、即、返書を書くのが、わが国では恋文ならずとも昔からの慣わしであつた。

手紙は必要があるから書くのであり、無聊の暇つぶしに書くことではない。ハガキならば、十五分もあれば返書は書けるのである。もっとも、利害や金銭に関わるものであれば現代でも即日返事を書くであらうが、気の利いた人は電話やFAX、パソコンあるいは携帯電話のメールで応えるのかも知れない。

私はある機会があつて、長良川を一望にできる一時期「信長」の居城であつた岐阜城に行つたことがある。そこには信長と「秀吉」の真筆が並べて陳列されてあつた。比べるまでもなく二人の「書」は大きく違つていた。

うつけ者といわれた信長の「手」は師に付いて習つたもので整つていて読みやすく、秀吉の「手」は自己流ではあるが、人間味が出ていて親しみが感じられた。間違つた文字は消し、挿入まで使つてゐるのである。秀吉は常に戦場の第一線にいて、書などに意を払つてゐる寸暇はなかつたはずである。想像するに、彼の文字は目で地面に書き、それを頭に記憶し、心で咀嚼そしゃくして自分のものにした形だと思われるからである。

しかし、運命は皮肉であつた。天才信長は夢半ばで本能寺で憤死し、その仇討ちを天下に号令したのが秀吉の拙い手の直筆だったのである。秀吉の手は花押がなくても、誰をも信じさせることが出来たのであつた。

文字の上手を論じるならばどうしても挙げなければならない人がある。全く時代は違ふが弘法大師と良寛さんである。二人とも僧という点で一致している。日本では永い間、僧は最高の文化人だった

のである。良寛さんは村の童たちと鞠つきだけをしていた訳ではなかったのである。「良寛記念館」に残っている書は見事である。ただ我々には流麗過ぎて悔しいほど読みにくいのである。これは美しく書こうという意識を突き抜けた手が書かせたものだからであろう。大愚と号していたが、円通寺の国仙和尚から和尚位の印可を貰ったが、寺には入らずに諸国を旅し、位階や権威をさっぱりと捨て、四十歳ごろ五合庵に住んだと云われている。ある意味では僧のエリートコースに乗り切れなかったのかも知れない。同じような意味では僧と神官の違いこそあれ兼好法師も鴨長明後に出家なども良寛さんと似ている。もしも、この人たちがその道の頂点を極めていたなら「徒然草」も「方丈記」もこの世には無かったことになる。良寛さんは道元を深く尊敬し、自らの戒語を残している。

良寛禅師戒語

- 一、 手柄話をしない。
- 二、 自慢話をしない。
- 三、 へらず口をしゃべらない。
- 四、 他人の隠し事を明るみにしない。
- 五、 自分の素性を他人に云わない。

六、 物事の先取りをしない。

七、 辛さを嘆かない。

八、 言葉に気をつける。

九、 はやり 流行言葉を使わない。

十、 悟りくさい話をしない。

十一、 学者ぶらない。

十二、 あくびしながら経をあげない。

などなど多数ある。

良寛さんは「五合庵」で何を考え、何を願っていたのだろうか。末世とも言える江戸時代の末期、権力に迎合し墮落する僧の中にあって、誰にも知られないようにひとり己を深めていたのかも知れない。それが良寛さんがたどり着いた「書」という「悟道」だったのかも知れない。貞信尼との和歌の往来は人間味の中に毅然とした一線を保っていたことが推測できる。

基本的に「書」に上手、下手はない。書とはある意味で書き癖である。これこそが個性なのだ。本来文字は記号だから内容と共に真意が相手に正確に伝わればよいのである。従って、すべての人が「書家」になる必要はないのである。書簡の出発点は達意から始まった

ことを失念しないようにしたい。パソコンという怪物が創り出す整った冷たい文字の羅列は、受け手の心は動かさない。これから、愚直に頑固に自分の身体に沁みこんだ肉筆の文字を書き続けるしかない。

私は昨年も拙い癖字の年賀状を五百枚ほど書いた。自分自身が生きていることに感謝し、一枚毎に旧知の先輩、友人、知人、教え子たちのあの日の顔を思い浮かべながら。